

ナポレオンと田虫

横光利一

青空文庫

ナポレオン・ボナパルトの腹は、チュイレリーの観台の上で、折からの虹にじと対戦するかのよう張り合っていた。その剛壮な腹の頂点では、コルシカ産の瑪瑙めのうの釦ボタンが巴里パリの半景を歪ゆがませながら、幽かすかに妃きさきの指紋のために曇っていた。

ネー將軍はナポレオンの背後から、ルクサンブルの空にその先端を消している虹の足を眺ながめていた。すると、ナポレオンは不意にネーの肩に手をかけた。

「お前はヨーロツパを征服する奴は何者だと思う」

「それは陛下が一番よく御存知でございましょう」

「いや、余よりもよく知っている奴がいそうに思う」

「何者でございます」

ナポレオンは答の代りに、いきなりネーのバンドの留金がチョッキの下から、きらきらと夕映ゆうばえに輝く程強く彼の肩を揺ゆすって笑い出した。

ネーにはナポレオンのこの奇怪な哄こう笑しょうの心理がわからなかった。ただ彼に揺すられ

ながら、恐るべき占うらなから逃がれた蛮人のような、大きな哄笑を身近に感じただけである。

「陛下、いかがなさいました」

彼は語尾の言葉のままに口を開あけて、暫しばらくナポレオンの顔を眺めていた。ナポレオンの唇くちびるは、間もなくサン・クルウの白い街道の遠景の上で、皮肉な線を描き出した。ネーには、このグロテスクな中に弱味を示したナポレオンの風貌ふうぼうは初めてであった。

「陛下、そのヨーロッパを征服する奴は何者でございます？」

「余だ、余だ」とナポレオンは片手を上げて冗談を示すと、階段の方へ歩き出した。

ネーは彼の後から、いつもと違ったナポレオンの狂った青い肩の均衡を見詰めていた。

「ネー、今夜はモロッコの燕つばめの巢をお前にやろう。ダントンがそれを食いたさに、椅子から転がり落ちたと云う代物しろものだ」

二

その日のナポレオンの奇怪な哄笑に驚いたネー將軍の感覚は正当であった。ナポレオンの腹の上では、径五寸の田虫が地図のように猖獗しょうけつを極きわめていた。この事実を知ってい

たものは貞淑無二な彼の前皇后ジョセフィヌただ一人であった。

彼の肉体に植物の繁茂し始めた歴史の最初は、彼の雄図を確証した伊太利征伐のロジの戦の時である。彼の眼前で彼の率いた一兵卒が、弾丸に撃ち抜かれて顛倒した。彼はその銃を拾い上げると、先登を切つて敵陣の中へ突入した。彼に続いて一大隊が、一聯隊が、そうして敵軍は崩れ出した。ナポレオンの燦然たる栄光はその時から始まった。だが、彼の生涯を通して、アングロサクソンのように彼を苦しめた田虫もまた、同時にそのときの一兵卒の銃から肉体へ移つて来た。

ナポレオンの田虫は頑癬の一種であつた。それは総ゆる皮膚病の中で、最も頑強な痒さを与えて輪郭的に拡がる性質をもつていた。搔けば花卉を踏みにじつたような汗が出た。乾けば素焼のように素朴な白色を現した。だが、その表面に一度爪が当つたときは、この湿疹性の白癬は、全図を拡げて猛然と活動を開始した。

或る日、ナポレオンは侍医を密かに呼ぶと、古い太鼓の皮のように光沢の消えた腹を出した。侍医は彼の傍へ、恭謙な禿頭を近寄せて眩いた。

「Trichophycia, Eczema, Marginatum.」

彼は頭を傾け変えるとボナパルトに云つた。

「閣下、これは東洋の墨をお用いにならなければなりません」

この時から、ナポレオンの腹の上には、東洋の墨が田虫の輪郭に従って、黒々と大きな地図を描き出した。しかし、ナポレオンの田虫は西班牙スペインとはちがっていた。彼の爪が勃ぼつぽ々たる雄図をもって、彼の腹を引つ掻き廻せば廻すほど、田虫はますます横に分裂した。ナポレオンの腹の上で、東洋の墨はますますその版図を拡張した。あたかもそれは、ナポレオンの軍馬が破竹のごとくオーストリアの領土を侵しんしよく蝕くして行く地図の姿に相似していた。——この時からナポレオンの奇怪な哄笑は深夜の部屋の中で人知れず始められた。彼の田虫の活動はナポレオンの全身を戦せんりつ慄りつさせた。その活動の最高頂は常に深夜に定っていた。彼の肉体が毛布の中で自身の温度のために膨張する。彼の田虫は分裂する。彼の爪は痒さに従って活動する。すると、ますます活動するのは田虫であった。ナポレオンの爪は彼の強烈な意志のままに暴力を振って対抗した。しかし、田虫には意志がなかった。ナポレオンの爪に猛烈な征服慾があればあるほど、田虫の戦闘力は紫色を呈して強まった。全世界を震撼しんかんさせたナポレオンの一個の意志は、全力を挙あげて、一枚の紙のごとき田虫と共に格闘した。しかし、最後にのた打ちながら征服しなければならなかったものは、ナポレオン・ボナパルトであった。彼は高価な寝台の彫刻に腹を当てて、打ちひしがれた獅し

子のように腹這いながら、奇怪な哄笑を洩すのだ。

「余はナポレオン・ボナパルトだ。余は何者をも恐れぬぞ、余はナポレオン・ボナパルトだ」

こうしてボナパルトの知られざる夜はいつも長く明けていった。その翌日になると、彼の政務の執行力は、論理のままに異常な果断を猛々しく現すが常であった。それは丁度、彼の猛烈な活力が昨夜の頑癪に復讐しているかのようであった。

そうして、彼は伊太利を征服し、西班牙を牽制し、エジプトへ突入し、オーストリアとデンマルクとスエーデンを侵略してフランスの皇帝の位についた。

この間、彼のこの異常な果断のために戦死したフランスの壮丁は、百七十万人を数えられた。国内には廢兵が充満した。梃りの声が各戸の入口から聞えて来た。行人の喪章は到る処に見受けられた。しかし、ナポレオンは、まだ密かにロシアを遠征する機会を狙つてやめなかつた。この蓋世不拔の一代の英氣は、またナポレオンの腹の田虫をいつまでも癒す暇を与えなかつた。そうして彼の田虫は彼の腹へ癌のようにますます深刻に根を張つていった。この腹に田虫を繁茂させながら、なおかつヨーロッパの天地を攪乱させているナポレオンの姿を見ていると、それは丁度、彼の腹の上の奇怪な田虫が、黙々として

ヨーロッパの天地を攪乱しているかのようであった。

三

ナポレオンはジェーエーブローの条約を締結してオーストリアから凱旋がいせんすると、彼の糟糠そうこうの妻ジョセフィヌを離婚した。そうして、彼はフランスの皇帝の權威を完全に確立せんがため新しき皇妃、十八歳の MARIA・ルイザを彼の敵国オーストリアから迎えた。彼女はハプスブルグ家、オーストリア神聖羅馬皇帝ローマの娘である。彼女の部屋はチュイレリーの宮殿の中で、ナポレオンの寢室の隣りに設けられた。しかし、新しきナポレオン・ボナパルトは、またこの古い宮殿の寢室の中で、彼の厩ぼうだい大な田虫の輪郭と格闘を続けなければならなかった。

ナポレオンは若くして麗しいルイザを愛した。彼の前皇后ジョセフィヌはロベスピエールに殺されたボルネー伯の妻であった。彼女はナポレオンより六歳の年上で先夫の子を二人までも持つていた。今、彼はルイザを見ると、その若々しい肉体はジョゼフィヌに比べて、割られた果実のように新鮮に感じられた。だが、そのとき彼自身の年齢は最早四十一

歳の坂にいた。彼は自身の頑癪を持った古々しい平民の肉体と、ルイザの若々しい十八の高貴なハプスブルグの肉体とを比べることは淋さびしかった。彼は絶えず、前皇后ジョセフィヌが彼から圧迫を感じたと同様に、今彼はハプスブルグの娘、ルイザから圧迫されねばならなかった。このため、彼は彼女の肉体からの圧迫を押しつけ返すためにさえも、なお自身の版図をますますヨーロッパに拡げねばならなかった。何ぜなら、コルシカの平民ナポレオンが、オーストリアの皇女ハプスブルグのかくも若く美しき娘を持ち得たことは、彼がヨーロッパ三百万の兵士を殺して贏かち得た彼の版図の強大な力であったから。彼はルイザを見たと同時に、油を注がれた火のようにいよいよロシア侵略の壮図を胸に描いた。殊ことに彼はルイザを皇后に決定する以前、彼の選定した女はロシアの皇帝の妹アンナであった。しかし、ロシアは彼の懇望を拒絶した。そうして、第二に選ばれたものはこのハプスブルグの娘ルイザである。ルイザにとって、ロシアは良人おとこの心を牽ひきつけた美しきアンナの住む国であった。だが、ナポレオンにとっては、ロシアは彼の愛するルイザの微笑を見んがためばかりにさえも、征服せらるべき国であった。左様に彼はルイザを愛し出した。彼が彼女を愛すれば愛するほど、彼の何よりも恐れ始めたことは、この新しい崇高優美なハプスブルグの娘に、彼の醜い腹の頑癪を見られることとなって来た。もし出来得ることであ

るならば、彼はこのとき、フランス皇帝ナポレオン・ボナパルトの莊嚴な肉体の価値のため、彼の伊太利と腹の田虫とを交換したかも知れなかった。こうして森嚴な伝統の娘、ハプスブルグのルイザを妻としたコルシカ島の平民ナポレオンは、一度ヨーロッパ最高の君主となつて納まると、今まで彼の幸福を支えて来た彼自身の恵まれた英氣は、俄然として虚榮心に変つて来た。このときから、彼のさしもの天賦の幸運は揺れ始めた。それは丁度、彼の田虫が彼を幸運の絶頂から引き摺り落すべき醜惡な平民の体臭を、彼の腹から嗅ぎつけたかのようであつた。

四

千八百四年、パリーの春は深まつていった。そうして、ロシアの大平原からは氷が溶けた。

或る日、ナポレオンはその勃勃たる傲慢な虚榮のままに、いよいよ国民にとつても苦痛なロシア遠征を決議せんとして諸將を宮殿に集合した。その夜、議事の進行するに連れて、思わずもナポレオンの無謀な意志に反対する諸將が続々と現れ出した。このため

ナポレオンは終に遠征の反対者將軍デクレスと数時間に渡つて激論を戦わさなければならなかつた。デクレスはナポレオンの征戦に次ぐ征戦のため、フランス国の財政の欠乏の人の減少と、人民の怨嗟と、戦いに対する国民の飽満とを指摘してナポレオンに詰め寄つた。だが、ナポレオンはヨーロッパの平和克復の使命を楯にとつて応じなかつた。デクレスは最後に席を蹴つて立ち上ると、慰撫する傍のネー將軍に向つて云つた。

「陛下は気が狂つた。陛下は全フランスを殺すであらう。万事終つた。ネー將軍よ、さらばである」

ナポレオンはデクレスが帰ると、忿懣の色を表してひとり自分の寢室へ戻つて来た。だが彼はこの大遠征の計画の裏に、絶えず自分のルイザに対する弱い歛心が潜んでいたのを考えた。殊にそのため部下の諸將と争わなければならなかつたこの夜の会議の終局を思うと、彼は腹立たしい淋しさの中で次第にルイザが不快に重苦しくなつて来た。そうして、彼の胸底からは古いジョセフィヌの愛がちらちらと光を上げた。彼はこの夜、そのまま皇后ルイザにも逢わず、ひとり怒りながら眠りについた。

ナポレオンの寢室では、寒水石の寢台が、ペルシヤの鹿を浮かべた緋緞帳に囲まれて彼の寝顔を捧げていた。夜は更けていった。広い宮殿の廻廊からは人影が消えてただ裸像

の彫刻だけが黙然と立っていた。すると、突然ナポレオンの腹の上で、彼の太い十本の指が固まった鉤かぎのように動き出した。指は彼の寝巻を掻きむしった。彼の腹は白痴のような田虫を浮かべて寝衣ねまきの襟えりの中から現れた。彼の爪は再び迅速な速さで腹の頑癬を掻き始めた。頑癬からは白い脱皮がめくれて来た。そうして、暫くは森閑とした宮殿の中で、脱皮を掻きむしるナポレオンの爪音だけが呖くようにぼりぼりと聞えていた。と、俄にわかに彼の太い眉毛まゆげは、全身の苦痛を受け留めて慄ふるえて来た。

「余はナポレオン・ボナパルトだ。余はナポレオン・ボナパルトだ」

彼は足に纏まつわる絹の夜具を蹴けりつけた。

「余は、余は」

彼は張り切った綱が切れたように、突如として笑い出した。だが、忽たちまち彼の笑声がしずが鎮まると、彼の腹は獣を入れた袋のように波打ち出した。彼はがごと跳ね返った。彼の片手は緞帳ひだの襷つかをひつ攫つかんだ。紅の襷は鋭い線を一握ひとにぎりの拳の中に集めながら、一揺れ毎に銀を鳴らして迂すべり出した。彼は枕まくらを攫んで投げつけた。彼はピラミッドを浮かべた寝台の彫刻へ広い額こすを擦りつけた。ナポレオンの汗はピラミッドの斜線の中へにじみ込んだ。緞帳は揺れ続けた。と彼は寝台の上に跳ね起きた。すると、再び彼は笑い出した。

「余は、余は、何物をも恐れはせぬぞ。余はアルプスを征服した。余はプロシヤを撃ち破った。余はオーストリアを蹂躪した」だが、云いも終らぬ中に、ナポレオンの爪はまた練磨された機械のように腹の頑癬を掻き始めた。彼は寝台から飛び降りると、床の上へべたりと腹を押しつけた。彼の寝衣の背中に刺繍されたアフガニスタンの金の猛鳥は、彼を鋭い爪で押しつけていた。と、見る間に、ナポレオンの口の下で、大理石の輝きは彼の苦悶の息のために曇って来た。彼は腹の下の床石が温まり始めると、新鮮な水を追う魚のように、また大理石の新しい冷たさの上を這い廻った。

丁度その時、鏡のような廻廊から、立像を映して近寄って来るルイザの桃色の寝衣姿を彼は見た。

彼は起き上がることが出来なかつた。何ぜなら、彼はまだ、ハプスブルグの娘、ルイザに腹の田虫を見せたことがなかつたから。ルイザは呆然として、皇帝ナポレオン・ボナパルトが射られた獣のように倒れている姿を眺めていた。

「陛下、いかがなさいました」

ボナパルトは自分の傍に蹲み込む妃の体温を身を感じた。

「ルイザお前は何しに来た？」

「陛下のお部屋から、激しい呻うめきが聞えました」

ルイザはナポレオンの両脇に手をかけて起そうとした。ナポレオンは周章あわてて拮たつた寝衣えりの襟えりをかき合せると起き上った。

「陛下、いかがなされたのでございます」

「余は恐ろしい夢を見た」

「マルメーゾンのジョゼフィヌさまのお夢でございましょう」

「いや、余はモローの奴が生き返った夢を見た」

と、ナポレオンは云いながら、執拗しつような痒かゆさのためにまた全身を慄ふるわせた。

「陛下、お寒いのでございますか」

「余は胸が痛むのだ」

「侍医をお呼びいたしましょうか」

「いや、余は暫くお前と一緒に眠れば良い」

ナポレオンはルイザの肩に手をかけた。ルイザはナポレオンの腕から戦慄せんりつを噛かみ殺した力強い痙攣けいれんを感じながら、二つの鑲はのひきち切れた緞帳でんじやうの方へ近寄った。そこには常に良人おっとの脱はずきなかつた胴巻たうまきが蹴はられたように垂れ落ちて縮んでいた。絹の敷布は寝台の上

から掻き落されて開いた緞帳の口から湿った枕と一緒にのみ出ていた。

ナポレオンは寝台に腰を降ろすとルイザの脹ふくらかな腰に手をかけた。だが、彼は今ハプスブルグの娘に、自分の腹をかくし通した苦痛な時間が腹立たしくなつて来た。彼は腹部の醜い病態をルイザの眼前にさらしたかった。その高貴をもつて全ヨーロッパに鳴り響いたハプスブルグの女の頭上へ、彼は平民の病いを堂々と押しつけてやりたい衝動を感じ出した。——余は一平民の息子である。余はフランスを征服した。余は伊太利を征服した。

余は西班牙とプロシヤとオーストリアを征服した。余はロシアを蹂躪するであろう。余はイギリスと東洋を蹂躪する。見よ、ハプスブルグの娘——。

ナポレオンはひき剥はぐのように、寝衣の両襟をかき拵げた。

ルイザの視線はナポレオンの腹部に落ちた。ナポレオンの腹は、猛鳥の刺繍の中で、毛を落した犬のように汁を浮べて爛ただれていた。

「ルイザ、余と眠れ」

だが、ルイザはナポレオンの権威に圧迫されていたと同様に、彼の腹の、その刺繍のよ
うな毒毒しい頑癪からも圧迫された。オーストリアの皇女、ハプスブルグの娘は、今初めて平民の醜さを眼前に見たのである。

ナポレオンは彼女の傍へ身を近づけた。ルイザは緞帳の裾を踏みながら、恐怖の眉を擡めて反り返った。今はナポレオンは妻の表情から敵を感じた。彼は彼女の手首をとって引き寄せた。

「寄れ、ルイザ」

「陛下、侍医をお呼びいたしましょう。暫くお待ちなされませ」

「寄れ」

彼女は緞帳の襞に顔を突き当て、翻るように身を躍らせて、広間の方へ馳け出した。ナポレオンは明らかに貴族の娘の侮辱を見た。彼は彼の何者よりも高き自尊心を打ち砕かれた。彼は突つ立ち上ると大理石の鏡面を片影のように這って行くハプスブルグの娘の後姿を睨んでいた。

「ルイザ」と彼は叫んだ。

彼女の青ざめた顔が裸像の彫刻の間から振り返った。ナポレオンの炯々とした眼は緞帳の奥から輝いていた。すると、最早や彼女の足は慄えたまま動けなかった。ナポレオンは寝衣の襟を拵げたままルイザの方へ進んでいった。彼女はまたナポレオンの腹を見た。鎮まり返った夜の宮殿の一隅から、薄紅の地図のような怪物が口を開けて黙々と進んで来

た。

「陛下、お待ちなされませ、陛下」

彼女は空虚の空間を押しつけるように両手を上げた。

「陛下、暫くでございます。侍医をお呼びいたします」

ナポレオンは妃の腕を掴んだ。彼は黙つて寝台の方へ引き返そうとした。

「陛下、お赦しなされませ。御無理をなされませと、私はウィーンへ帰ります」

磨かれた大理石の三面鏡に包まれた光の中で、ナポレオンとルイザとは明暗を閃めかせ

つつ、分裂し粘着した。争う色彩の尖影が、屈折しながら鏡面で衝撃した。

「陛下、お気が狂わせられたのでございます。陛下、お放しなされませ」

しかし、ナポレオンの腕は彼女の首に絡まりついた。彼女の髪は金色の渦を巻いてきらきらと慄えていた。ナポレオンの残忍性はルイザが藻掻けば藻掻くほど怒りと共に昂進した。彼は片手に彼女の頭髪を縄のように巻きつけた。——逃げよ。余はコルシカの平民の息子である。余はフランスの貴族を滅ぼした。余は全世界の貴族を滅ぼすであろう。逃げよ。ハプスブルグの女。余は高貴と若さを誇る汝の肉体に、平民の病いを植えてやるであろう。

ルイザはナポレオンに引き摺られてよろめいた。二人の争いは、トルコの香料の匂いを馥郁と撒き散らしながら、寝台の方へ近づいて行った。緞帳が閉められた。ペルシヤの鹿の模様は暫く緞帳の襷の上で、中から突き上げられる度毎に脹れ上って揺れていた。

「陛下、お気をお鎮めなさりませ。私はジョセフイヌさまへお告げ申すでございませう」
緞帳の間から逞しい一本の手が延びると、床の上にはみ出していた枕を中へ引き摺り込んだ。

「陛下、今宵は静にお休みなされませ。陛下はお狂いなされたのでございます」

ペルシヤの鹿の模様は鎮まった。彫刻の裸像はひとり円柱の傍で光った床の上の自身の姿を見詰めていた。すると、突然、緋の緞帳の裾から、桃色のルイザが、吹きつけた花のように転がり出した。裳裾が宙空で花開いた。緞帳は鎮まった。ルイザは引き裂かれた寝衣の切れ口から露わな肩を出して倒れていた。彼女は暫く床の上から起き上ろうとしなかった。掻き乱された彼女の金髪は、波打ったまま大理石の床の上へ投げ出された。

彼女は漸く起き上ると、青ざめた頬を涙で濡らしながら歩き出した。彼女の長い裳裾は、彼女の苦痛な足跡を示しつつ緞帳の下から憂鬱に繰り出されて曳かれていった。

ナポレオンの部屋の重々しい緞帳は、そのまま湿った旗のように明方まで動かなかった。

五

その翌日、ナポレオンは何者の反対をも切り抜けて露西亜遠征の決行を発表した。この現象は、丁度彼がその前夜、彼自身の平民の腹の田虫をハプスブルグの娘に見せた失敗を、再び一時も早く取り返そうとしているかのように敏活であつた。殊に彼はルイザを娶つてから彼に皇帝の重きを与えた彼の最も得意とする外征の手腕を、まだ一度も彼女に見せたことがなかつた。

ナポレオン・ボナパルトのこの大遠征の規模作戦の雄大さは、彼の全生涯を通じて最も莊嚴華麗を極めていた。彼は国内の三十万の青年に動員令に対する準備を命じた。更に健全な国内の壮丁九十万人を国境と沿海戦の守備に充てた。なおその上に、彼はフランス本国から二十万人を、ライン同盟国から十四万七千人、伊太利から八万人を、波蘭とプロシヤとオーストリアから十一万人、これに仏領各地から出さしめた軍隊を合せて七十七万人に、加うるに予備隊を合して総数百万万余人の軍勢をドレスデンへ集中させた。そうして、ナポレオンは彼の娘のごとき皇后ルイザを連れてパリからドレスデンまで出て行つ

た。ドレスデンではルイザの父オーストリア皇帝、プロシヤ皇帝、同盟国の最高君主が一同となつて、百十万余人の軍隊と共に彼ら二人の到着を出迎えた。

この古今未曾有の莊嚴な大歓迎は、それは丁度、コルシカの平民ナポレオン・ボナパルトの腹の田虫を見た一少女、ハプスブルグの娘、ルイザのその両眼を眩惑せしめんとしている必死の戯れのものであつた。

こうして、ナポレオンは彼の大軍を、いよいよフリードランドの大原野の中へ進軍させた。

六

ナポレオンの腹の上では、今や田虫の版図は径六寸を越して拮つていた。その圭角をなくした円やかな地図の輪郭は、長閑な雲のように微妙な線を張つて歪んでいた。侵略された内部の皮膚は乾燥した白い細粉を全面に漲らせ、荒された茫茫たる沙漠のような色の中で、僅かに貧しい細毛が所どころ昔の激烈な争いを物語りながら枯れかかつて生えていた。だが、その版図の前線一円に渡つては数千万の田虫の列が紫色の塹壕を築いてい

た。塹壕の中には膿うみを浮かべた分泌物ぶんびつぷつが溜たまっていた。そこで田虫の群団は、鞭毛べんもうを振りながら、雑然と縦横に重なり合い、各々横に分裂しつつ二倍の群団となって、脂あぶらの漲みなぎった細毛の森林の中を食い破やぶっていた。

フリードランドの平原では、朝日が昇ると、ナポレオンの主力の大軍がニエメン河を横断してロシアの陣営へ向むかっていた。しかし、今や彼らは連戦連勝の栄光の頂点こしごで、尽つくく彼らの過去に殺戮さつりくした血色のために気が狂くるっていた。

ナポレオンは河岸の丘の上からそれらの軍兵を眺ながめていた。騎兵と歩兵と砲兵と、服色燦爛さんらんたる数十万の狂人の大軍が林の中から、三色の雲となつて層々と進軍した。砲車の輻わだちの連続は響を立てた河原のようであつた。朝日に輝いた銃の波頭は空中に虹を撒いた。栗毛くりげの馬の平原は狂人を載せてうねりながら、黒い地平線を造つて、潮のように没落へと溢あふれていった。

青空文庫情報

底本：「機械・春は馬車に乗って」新潮文庫、新潮社

1969（昭和44）年8月20日初版発行

1995（平成7）年4月10日34刷

入力：MAMI

校正：松永正敏

2000年10月7日公開

2011年2月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ナポレオンと田虫

横光利一

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>